

## 弁別刺激と動機づけ操作

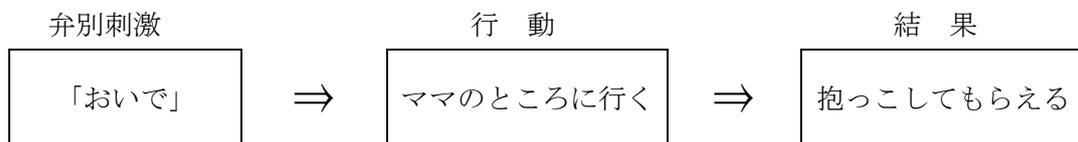
2020.11.1 新潟定例会

藤坂龍司

### 1. 弁別刺激

#### (1) 三項随伴性

ABA では、人の行動は大体以下のような図式で起こると考えられている。まず行動の引き金となる事前の刺激（出来事）があり、それに伴って行動が起こり、それに伴ってそれを強化する刺激（出来事）が発生する。この事後の出来事が強化子となり、行動を強化する。このとき、行動の引き金となる事前の刺激のことを、「弁別刺激」という。また弁別刺激⇒行動⇒結果の関係を「三項随伴性」と呼ぶ。

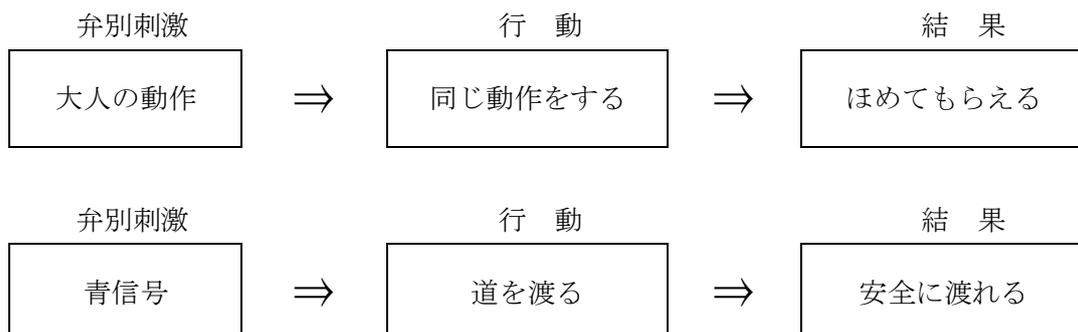


<事前の刺激が弁別刺激になるわけ>

事前の刺激がすべて行動を引き起こす弁別刺激になるわけではない。事前の刺激が行動を引き起こす力を持つようになるのは、強化の働きによる。その刺激の直後の行動だけが（特に）強化され、その刺激が起こっていないときの行動は（あまり）強化されない、ということが繰り返されることによって、はじめて、その特定の刺激の直後に、その行動が起こりやすくなる。

例えば、ママが「おいで」と言った直後にママのところに行くと、抱っこしてもらえたり、おやつをもらえたり、いいことが起こることが多い。一方、「おいで」と言われていないときにママのところに行っても、ママはお掃除をしていたりして、抱っこしてもらえないことが多い。そうすると、子どもは「おいで」と言われたときに、特にママのところに行く傾向を持つようになる。言い換えれば、「おいで」という言葉が、「ママのところに行く」という子どもの行動を引き起こす力を持つようになる。これを ABA では『ママのところに行く』という子どもの行動は、ママの「おいで」という言葉の刺激コントロール（刺激統制）のもとに服した」という言い方をする。

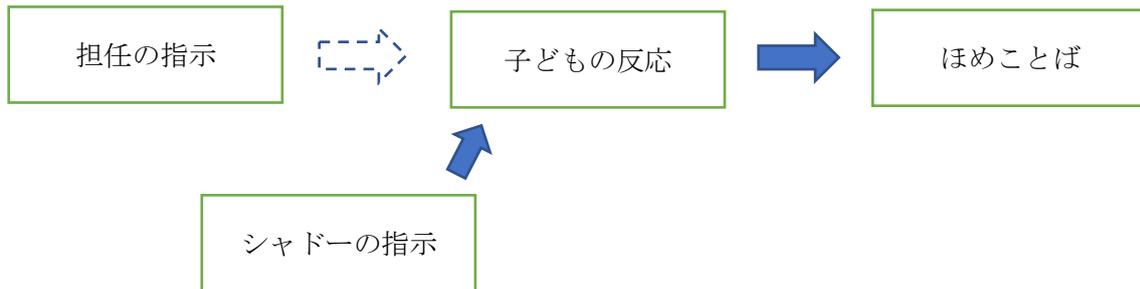
<弁別刺激は指示の言葉だけとは限らない>



### <プロンプト刺激からの移行>

適切な刺激に対して適切な行動をとらせるためには、大抵の場合、まずプロンプトをして行動を促し、それを強化しながら、徐々にプロンプトを減らす必要がある。

例えば幼稚園で担任の先生の全体指示に反応させるためには、まずそばにいるシャドー（介助員）が小声で指示を出し、反応させ、小声でほめるなどして強化する。しかしこの段階では、子どもの反応の弁別刺激はシャドーの声かけであって、担任の先生の指示はまだ子供の反応にとっての弁別刺激になっていない。



それをうまく担任の指示にコントロールの所在を移行させるためには（この作業を「刺激統制の転移」という）、いつまでもシャドーが指示を繰り返すのではなく、先生の指示の直前に、「聞いて」と言ったり、無言で体をさわるなどの、よりさりげない刺激を中間段階とするとよいようだ。

### <般化と弁別>

ある刺激に反応させようとして訓練を繰り返していると、その刺激だけでなく、別の刺激にも反応してしまうようになることがある。

例えば、子どもの名前を呼んだら「はい」と手を上げる、という訓練をしていると、別の子どもの名前でも手を上げるようになる。これを「刺激般化」と呼ぶ。般化が好ましいこともあるが、この場合は好ましくない。

そこでその子供のの名前を呼んだ時には手を上げるが、別の名前を呼んだ時には手を上げない、という訓練をする必要がある。これを「刺激弁別訓練」という。

刺激の弁別を起こすには、基本的には、その特定の刺激に対する反応は強化するが、それ以外の刺激の時の反応は強化しない、という方法をとる。しかし実際のセラピー場面では、それだけでは時間がかかりすぎるので、追加の方策をとることが多い。例えば今の例では、「○○○○ちゃん」と子どもの名前を呼んだときは、プロンプトして「はい」と手を上げさせ、強化する一方で、「ぞうさん」「きりんさん」と別の名前を言った時は、「ん」と口をつぐんで手をお膝にする、という別の行動をプロンプトして、それができたら強化する。その方が、早く弁別が達成できるようである。

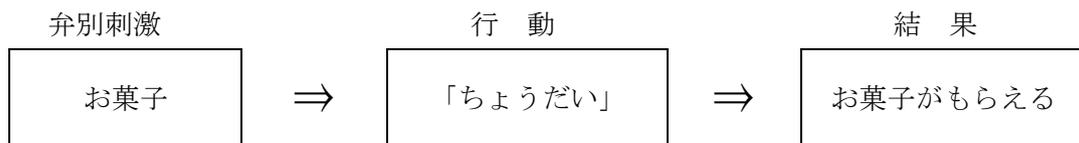
「○○○○ちゃん」 ⇒ 「ハイ」 + 手を上げる ⇒ 「上手！」

「ぞうさん」 ⇒ 「ん」 + 手はおひざ ⇒ 「上手！」

## 2. 動機づけ操作

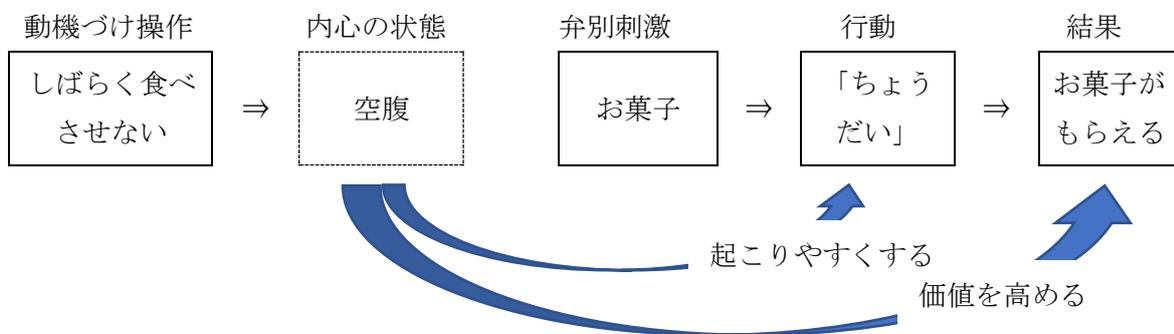
行動に影響を与える事前の働きかけは、弁別刺激のほかにもう一つある。それが「動機づけ操作」(MO、Motivating Operation)である。動機づけ操作とは、その人にその行動をとるためのモチベーションを高めたり、逆に低めたりする事前の操作である。

例えば、お菓子を見せると、「ちょうだい」と言えるようにしたいとする。三項随伴性だと以下のようになる。



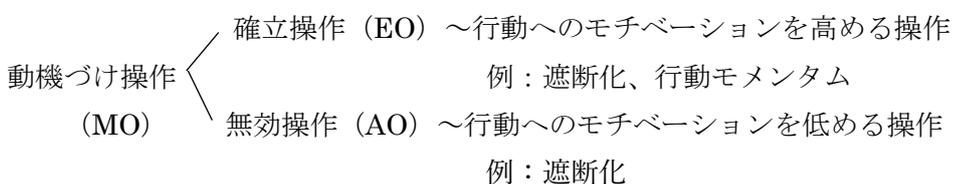
しかし子どもがもし、すでにご飯やおやつをたくさん食べておなか一杯だったら、お菓子を見ても「ちょうだい」とは言わないだろう。だから前提条件として、しばらくの間、食べ物を与えないで、おなかをすかせておく必要がある。

強化子をしばらく与えないことを「遮断化」という。遮断化は典型的な動機づけ操作である。遮断化すると、お菓子の強化子としての価値が高まる。それによってお菓子を手に入れる行動「ちょうだい」が起りやすくなる、と ABA では説明する。



動機づけ操作 (MO) のうち、遮断化のように、強化子の価値を高めることによって、行動を起りやすくなる (言い換えれば行動へのモチベーションを高める) 操作を「確立操作」(EO) という。

遮断化とは逆に、強化子をふんだんに与えておなか一杯にすることを「飽和化」という。飽和化させると、強化子の価値を低め、行動は起りにくくなる (言い換えれば、行動へのモチベーションを低める)。この操作を「無効操作」(AO) という。



### <セラピーにおける動機づけ操作>

#### ①強化子の効き目を高める

セラピーするときは、強化子の効き目を高め、保つように工夫する必要がある。

そのためには、

- ・小腹をすかせてから、セラピーに臨む（遮断化）。
- ・強化子用のとっておきのおもちゃは普段は隠しておく。
- ・強化子をちびちび与えることで、飽和化を遅らせる。
- ・強化子を間引くことで、飽和化を遅らせる。
- ・モチベーションが低いときは、強化子を「チラ見せ」する。
- ・モチベーションが低いときは、先に強化子を「たた上げ」して、期待を高める。

#### ②そのほかの工夫

- ・行動モメンタム（勢いをつける）

簡単な指示を1～2出して成功させて、モチベーションを高めてから、本来の指示を出す。

簡単な復習課題で成功させてから、難しい課題に入る。

- ・復習課題を混ぜる

苦手な課題と得意な課題を混ぜることで、成功できるチャンスを高め、モチベーションを上げる。

### <問題行動の対処法としての動機づけ操作>

問題行動を抑えるためには、逆に問題行動を強化している強化子を、あらかじめふんだんに与え、飽和化させてしまう、という方法がある。これも動機づけ操作の一種。

例えば、セラピーが嫌で、泣いたり、教材を投げたり、逃げ出したりする子どもの場合に、指示に応えられているかどうかに関係なく、最初は例えば30秒に一回、定期的に離席を許す。すると本人の望む自由がふんだんに与えられるので、満足してあまりセラピーから逃れようとしなくなる。

特定の行動と無関係に強化子を与えるので、この手法を「非随伴強化（NCR）」と呼んでいる。

NCRにこだわらなくても、例えば注目を求めて問題行動に走る子どもに対して、問題行動に走る前に、簡単な用事や活動をさせ、それをほめるなどして、事前にふんだんに注目を与えておけば、問題行動を起こすモチベーションをかなり抑えることができる。